京都大学医学部附属病院東構内出土の和歌墨書土器について

令和２年 12 月 15 日

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門

【発表要旨】

平成 12 年（2000）に、京都大学医学部附属病院東構内南東辺を発掘調査した結果、1 基の井戸跡から、12 世紀はじめごろの土師器小皿の破片３点が出土した。それらの内外面には、墨書がみうけられる。このほど共同研究を行ったところ、３片は接合すること、その内面の墨書は、『古今和歌集』に収められている一首に該当する可能性が高い、という点が明らかになった。くわえて、古代の和歌墨書土器は、難波津の歌のものを除くと、各地の遺跡から７点みつかっているけれども、それらはすべて平安時代前・中期のものに相当する。したがって、平安時代後期の和歌墨書土器がはじめて確認された、という点もまた、重要な事実としてあげることができる。

１．発掘調査の概要

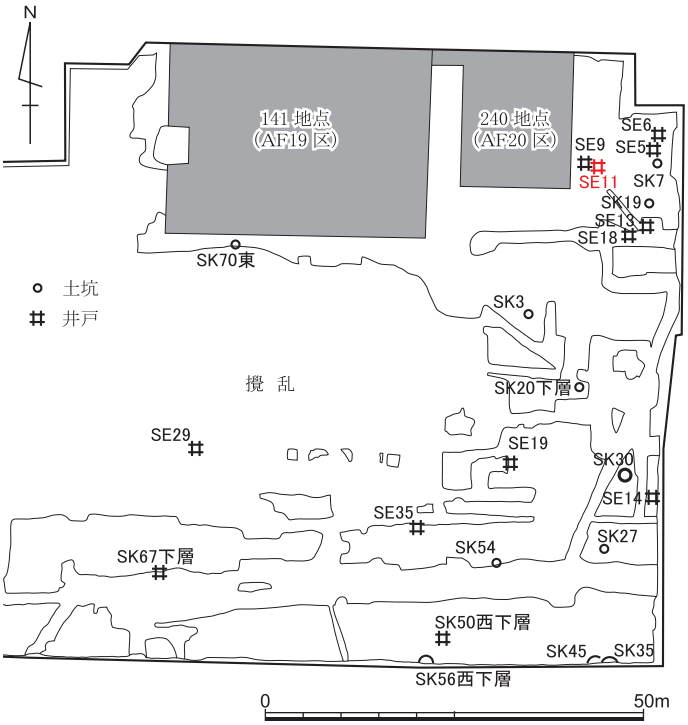
〈遺跡名〉聖護院川原町遺跡（京都大学医学部附属病院東構内の南東辺）

〈調査期間・調査面積〉平成 12 年３月 26 日～10 月 19 日・8000 ㎡

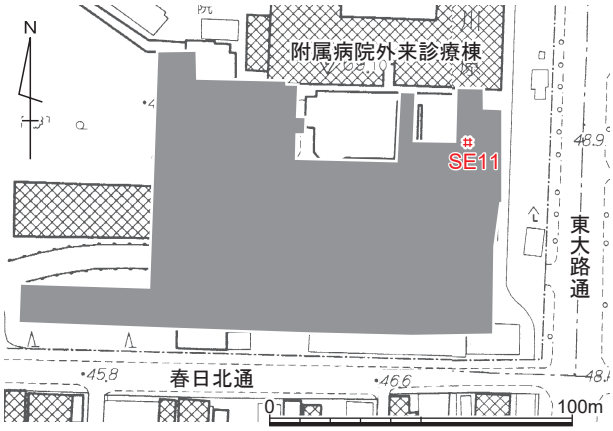
〈古代・中世の遺構・遺物〉井戸 12 基、土坑11 基、土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦など

〈和歌墨書土器〉井戸（ＳＥ11）の下部にあたる木枠内から２片、曲物内から１片が出土。

ＳＥ11 は、江戸時代の土取り穴によって上部が破壊され、下部のみ残存する。接合した３片は、口径約９㎝・器高約 1.5 ㎝の土師器小皿で、12 世紀初頭ごろに作られたもの。



古代・中世の遺構図

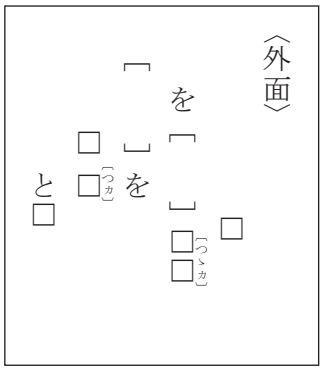


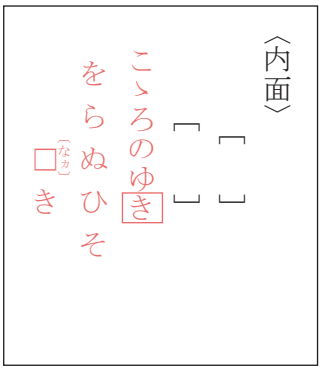
発掘調査地の位置

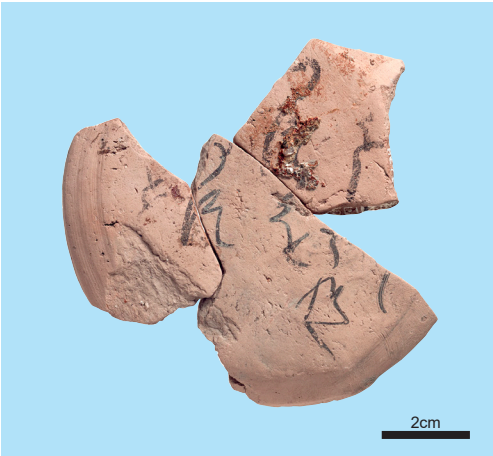
井戸 SE11（西から）

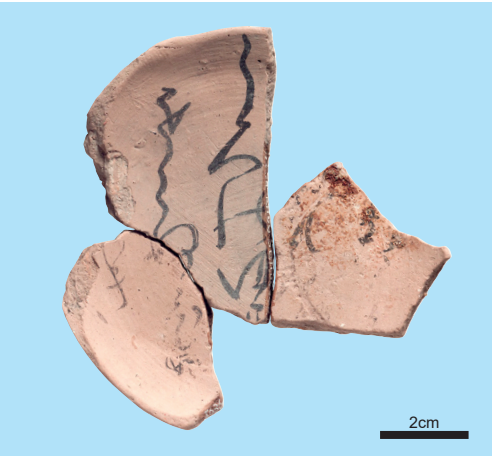
２．和歌墨書土器の読解

〈釈文〉









〈出典〉『古今和歌集』巻第７　賀歌

358　山高み雲居に見ゆる桜花心のゆきて折らぬ日ぞなき

※延喜５年（905）に、尚侍の藤原満子が、兄である右大将の藤原定国の四十の賀を祝った際に、定国の背後に立てた四季屏風の絵の余白に書き添えた歌の一首。凡河内躬恒の作。

３．和歌墨書土器の意義

和歌墨書土器が出土した地点は、白河の北部に位置する。白河は、12 世紀には、院政の拠点として政治的・宗教的・文化的にたいへん重要な地域であった。この和歌墨書土器がみつかった付近には、皇族や貴族などの邸宅が所在していた可能性が高く、井戸（ＳＥ11）は、そのなかに設けられたものであったと推測される。

今回の共同研究の結果、内面には、最初の勅撰集である『古今和歌集』のうちの一首が書かれている蓋然性が高い、という点が判明した。『古今和歌集』は、後世の作歌に大きな影響を与えており、その点をくみとりうる重要な資料であるといえる。

古代の和歌墨書土器は、難波津の歌を除くと、ＪＲ二条駅西側の藤原良相邸跡、平安京左兵衛府跡、鹿児島県霧島市の気色の杜遺跡などから７点みつかっている。それらはみな９・10 世紀、平安時代前・中期のものにあたる。しかし、このたびの和歌墨書土器は、12 世紀初頭ごろ、平安時代後期のものであり、そのはじめての事例となる。よって、平安時代後期の和歌文化の様相を考えるうえで、貴重な材料を提示しえたといえる。